

## 〔研究ノート〕

# オランダ東インド会社 (VOC) の投資者・運営者に関する研究 移住フランドル人のオランダ大航海時代への貢献という視点 (後)

小川 秀樹

### 目次

1. はじめに 本研究の視点
2. 本研究分野の先行研究について
3. 本研究の手法について
4. オランダとイギリスの東インド会社
5. オランダの三人のパイオニアたち —ポンプ・リンスホーテン・ハウトマン
6. 先駆会社「遠国会社」を作った人々
7. 先駆会社「旧会社」を作った人々
8. 新ブラバント会社 —アムステルダム商人のもう一つの源流
9. ゼーラントのミッデルブルフ会社
10. リーフデ号を派遣したロッテルダム会社など
11. VOC 発足後 総本山のアムステルダム・カーメル
12. 権限絶大なる船団司令官の出自
13. 幾人かの有名な船団司令官の事例 (以上前編)
  
14. 最高責任者 VOC 総督たちの群像 (ボットからスペックス・ブラウウェルまで)
15. VOC 総督たちの群像 (ディーメンからカンブホイスまで)
16. 18 世紀の VOC 総督 独占はさらに強まるのか
17. 19 世紀のオランダ直接統治以降の東インド総督

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

18. VOC・東インド総督の座を占め続けるフランドル系とユダヤ系
19. 平戸オランダ商館を初期に担ったのは誰なのか 三浦按針の関り
20. 17世紀後半に商館長を務めた人物
21. 18世紀以降の商館長たち フランドル人の活躍は留まるところを知らず
22. 「出島三賢人」の一人 フランドルの要素が目立つドイツ人ケンペル（ケンペル）
23. まとめ 本研究の意義・拡張性について（以上後編）

#### 14. 最高責任者 VOC 総督たちの群像（ボットからスペックス・ブラウウェルまで）

前編に引き続き本稿後編では、VOCで本国外で活躍した人物を調査していくが、まず初期のVOC総督を見ていく<sup>(1)</sup>。VOCになってから第六回目の派遣船団の司令官にして、そのまま東インドに常駐して初代VOC総督という栄誉を担ったピーテル・ボット（Both）は、総督ほどの人物でありながら生年や生地、任命された経緯等、ほとんど不明であり、宗教戦争・独立戦争という時代背景から、フランドルからの避難民家系である可能性を感じさせる。「Both」という名前自体は、ユダヤ系の姓とされ、異綴である Bot、Bota、Bote、Bott、Botte 等々、いずれもフランドルの姓であり、また同時代の画家であるボット兄弟（AndriesとJan）もフランドル系であり、総督ボットもフランドル系であろう。事実、VOC設立以前の1599年にルメール（前編参照）の新ブラバント会社から司令官に任命され航海を行っていることから、完全にフランドル系のブラバント会社との格別の関りが見て取れる。

ボットの母親は、その両親の姓（van der SchuerとZaell）からしてユダヤかつフランドル系を示唆する。父方では、祖父母の姓（BothとHuibertsdr van der Burgh）もフランドル系を示す。またボット本人の妻の名（Sophia van Duverden van Voordt）、さらに息子ヘンドリックの妻の名（Alida Evertsdr Vlugh）等が、フランドルのものである。初代総督か

---

(1) <https://www.geni.com/projects/Gouverneurs-Generaal-van-Nederlands-Indi%C3%AB/12304>

らしてきわめてフランドル的な人物が登用されていることが分かる。

第二代総督ヘラルト・レインスト (Reynst) は、本人はアムステルダム生まれだが、Reynst (Reijnst) という姓が完全にフランドルのものである他、イサック・ルメールらとともにブラバント会社の設立メンバーで(前編参照)、かつ事務局長になっている極めて特殊な事情がある。さらには配偶者 (Margrieta Nicquet) が裕福なアントワープ出身の豪商の娘であり (Jean Nicquet と Margaretha Bosman)、また彼の娘たちも、コイマンス (Coymans) 家という同じアントワープの豪商と縁組し、あるいはアントワープ出身の西インド会社の主導者プロムマート (Samuel Blommaert) と結婚したり、さらに一人などは、二度の結婚の相手のいずれもが典型的なフランドル姓の人物である (de Raet と Smisaert)。また妻の兄 (Jacques Nicquet) もヒンローペン (Geertruid Hinlopen) という、北米開拓で有名なフランドルの豪商の娘と結婚しており、二代目総督のレインストもフランドル系である。

3代目のラウレンス・レアル (Reael) は、アムステルダムの裕福な商人の息子で、ライデン大学で法律を学び、博士号を有する学識派である。父親 (Laurens Jacobsz Reael) はミッデルブルフ生まれ、祖父 (Jacob Laurens) はまだ Reael 姓を名乗っていなかった。Laurens 姓はユダヤ系かつラテン語由来のフランス語系のもので、ネーデルラントの南北、そしてバスクにある姓である。父親の代からフランドル人の牙城ミッデルブルフ生まれという事情からして、フランドル系コンベルソ (改宗ユダヤ系) の可能性がある。母の姓 (Geerte Pietersdr)、母方祖父母の名前 (Pieter Meeusz, Lisbeth Jansdr Pauw) のうち、Pieters、Meeus、Pauw、Jans がいずれもフランドルの姓であり、母方は完全にフランドルの血を引く家系と思われる。なお妻の両親はアントワープ出身であり、両親の姓 (Moor と Nicquet) もフランドルのものである。なお総督レアルの姉リズベットはカルヴァン派の宗教論争 (ドルト会議) で敗れた側の当事者ヤコブス・アルミニウスと結婚している<sup>(2)</sup>。

---

(2) ドルト会議 (1618~19年) において、カルヴァンの預定説をより厳密に解釈するホルマス派 (カルヴァン派) が、それを緩やかに解釈し、都会の大商人たちの支持を受けるアルミニウス派 (レモンストラント派) に勝利し、VOCの立役者オルデンバルネフェルトや国際法のグロティウスが失脚したが、論争の当事者ホルマス (本名ホマー、François Gomaer) はそもそも本人が

さて二度にわたり（第4代、6代）総督を務めたヤン・ピーテルスゾーン・クーン（Coen）だが、その歴代総督のなかでも英雄視されることの多い武断派の総督であり、父 Pieter Willemsz Coen は北ホラントのトウィスク出身であり（母親については不明）、そのホールン近郊の寒村から一代で身を起こして財を成したと言われ、おそらくは移住民と考えられる。他方、厳格なカルヴァン派の家系はほとんど不詳であり、姓であるクーン（Coen）というのは、Cohen や Coene と同根であり、ユダヤ系で、かつオランダよりもフランドルに多い姓である。妻（Eva Ment）の出自が有力な手掛かりとなるが、アムステルダム生まれで、両親の名前のうち（Claes Cornelisz Ment と Sophia Gerritsdre Benningh）、Ment 姓の由来は不明であるが、Claes Cornelisz という名前はフランドル系を示唆し、Benningh 姓自体はオランダ的であるが、家系に見える姓からはむしろフランドル系である（Ruysch、Auwel、Bogaert、van der Burch 等々）。クーンの死後、彼女は二度結婚して（Marinus Louysz van Bergen および Issac Buys）、配偶者家系に見える姓からして（Claes、Cornelis、Marinus、Louy、Buys、Grijp）、さらには姉妹の配偶者名 Vlack 等からしても、妻は明らかにフランドル系の家系である。クーン自身も、同様であろうと考えられる。

クーンは、13歳から7年間、ローマのフランドル人（Joost de Vissher）に徒弟に出されており、そこで簿記等の貿易を学び、また外国語を習得した。若い頃に築かれた彼のフランドルないしユダヤの人脈は、VOCでの採用・昇進に大きく貢献したことであろう。

二度にわたるクーン総督の任期に挟まれた第5代総督のピーテル・ド・カルパンティエ（de Carpentier）だが、一度目の任期を退任するクーンの推薦になるこの人物はそもそもアントワープ出身である。名前はフランス語式で、ユダヤ的なフランドルの名前、ワロンガルーツである。母親（Agnieta Delbecque）や父方祖母（Isabella Jansdr de Villers）の名前、さらに妻（Maria Ravenel）はミッデルブルフ生まれで、以上の全てがフランドルを指し示す。本人はライデン大学で哲学を学んだ学識派で、母方の叔父がVOCの設立に関わっている。バタヴィアに学校、市庁舎、孤児

---

ブルージュ生まれであり、ユトレヒト生まれのアルミニウス（本名ヘルマンズゾーン、Jacobus Hermansz）もフランドル系と思われる。

院などを整備するなど文人総督の側面があり、オーストラリア南岸のカーペンタリア湾は彼の名前に因んでいる。

第7代、第8代のジャック・スペックス、ヘンドリック・ブラウウェルは、その就任の順番もそのまま平戸の商館長コンビでもあった（後述参照）。ジャック・スペックス（Jacques Specx または Specks）は、名がフランス語式であり、また同音異綴の Specks 姓はフランドルの姓である。同時代にアユタヤ商館長を務めた人物は Cornelis Specks と綴られる。

スペックスは1585年にドルトレヒトで生まれているが、父母、兄弟等の系譜は不明であり、したがって配偶者や子息を頼りにスペックスの出自を推測する他ない。日本でのそれはさておき、本国での二度の結婚は、最初の妻の姓がボイスであり（Maria Odelia Buys）、妻の父方祖母の姓メルシェ（van der Mersche）、さらには曾祖母の姓パウウェルス（Pouwels）など、ボイス家がフランドル系であることを示している。他方、妻の母の姓ファン・デル・フース（van der Goes）からは特定が困難であるが、母方の祖母マリアの姓がファン・デル・ドゥッセン（van der Dussen）、さらにその祖先にもファン・ウェイデン（Weyden）やファン・ワッセナール（Wassenaer）等、フランドル姓が多く見られる。さらに母方祖父ピーテルから二代遡れば、アートがデルフト生まれでありながら、ルーヴェン大学に学んでおり、妻はそのルーヴェン生まれのマルガレータ・ファン・ビンヘム（van Binchem）であり、娘の名がジェネヴィエール・ニコライであり、ブリュッセル生まれのエヴェラールト・ニコライ（Nicolai）と結婚している。さらにその一代前からは、父方がハーグ生まれとなり、デ・ヨーデ（de Jode）というフランドル姓の妻がいる。なお妻マリアの兄弟のうち結婚した二人がカルドン（Cardon）、ソメル（Sommer）というユダヤ系かつフランドル系の配偶者を得ている。結局、妻マリアの出身のボイス家とファン・デル・フース家の両方が濃厚なフランドルの血筋を宿していると言えよう。なお15世紀の有名な画家ヒュゴー・ファン・デル・フースは、南のゲントの出身とされている。

さてスペックスの二人目の妻の姓はダブル（Magdalena Doublet）といい、Doublet はフランドルの姓である。元々、父方祖父ヤンはメッヘレン生まれである。曾祖母の姓ブーダン（Boudins）もユダヤかつフランドル系である。ダブルの母は、上記最初の妻のマリア・ボイスの母の妹マリアであり、スペックスは従姉妹の二人と順に結婚していることとなる。

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

以上から、スペックス本人がフランドルにルーツを有する可能性は極めて高い。

第8代総督にして二代目平戸商館長のヘンドリック・ブラウエル（Brouwer）は、姓名はフランドル的ではあるが、こちらも家系は詳らかでない。妻（Cecilia van Dorp）はフランドル姓を有し、同姓同名の息子は、ライデン市長を務めたが、二度結婚しており、妻（Sara Heydanus）は、少なくとも母親（Sara Loten）からフランドルの血を引いており、他方の妻（Margrieta van der Merct）は、両親から（van der Merct と Witsen）からフランドルの血を引いている。サラの娘（Clara Jacoba Brouwer）は、これも完全にフランドル姓の夫（Antonie van Asch van Wijck）がいる。なお17世紀の画家アドリアーン・ブラウエルもフランドル出身である。総じてブラウエルもフランドル系と考えられる。なおブラウエルは、東インド会社の中枢から非常に憶えがめでたい人物で、このあとさらに新設の西インド会社総督に任命されたものの、赴任航海の途中に南米沿海で死亡している。

## 15. VOC 総督たちの群像（ディーメンからカンパホイスまで）

第9代のアントニー・ファン・ディーメン（Antony van Diemen）はキューレンボルフ生まれである。ファン・ディーメンの9年に及ぶ総督在任期間は、とりわけセイロンのトリンコマレーでの権益確立など、VOCが最も順調に拡大していた時期である。「ディーメン」自体はアムステルダム近郊の地名である。両親の名前（Meus Anthonisz と Christina Hoevenaer）のうち、Meusはフランドルの姓であり、また名でもある。Anthonis や Hoevenaer も、フランドル的である。兄弟には二人の姉妹がいて、二人の配偶者（de Gruijter, van Ravenswaeij）はともにフランドル姓である。妻（Maria van Aelst）の父母の姓はAelstとAertsというフランドル姓である。さらに妻は計4度結婚しており、他の3人の夫の名前（Bartholomeus Kunst, Carel Constant, Gijsbert van der Houck）からして、フランドル系である。総じて、ファン・ディーメンは、きわめてフランドル的な家系である。

第10代のコルネリス・ヤンスゾーン・ファン・デル・レイン（Cornelis Jansz van der Lijn）は、アルクマール出身であり、Lijn（Lyn）という姓

だけでなく、Cornelis や Jans もフランドルのルーツを示唆している。父親 Jan の生年生地など不明であり、母親はその名さえ不明である。本人は二度結婚しており、妻の名前 (Levina Polet (ブレダ生まれ) と Geertruid van Mierop) からしてともにフランドル系であり、後者は、平戸商館長も務めたマクシミリアン・ルメールの未亡人である。熱血漢タイプであり、バタヴィアの次席フランソワ・カロンが本社との間に争いを抱えたとき、ブリュッセル生まれのカロンの側に立ち論陣を張り、自らも総督を辞職して解雇されたカロンとともに帰国するという挙に出た<sup>(3)</sup>。

11代目のカレル・レイニエルズブーン (Carel Reyniersz) は、アムステルダム生まれであり、歴代総督のなかでも最もフランドル的な名前の人物である。家系は不詳で、二度の結婚の配偶者 (Françoisa de Witt と Judith Barra) がいずれもフランドル系の人物と思われる。前者は、ドルトレヒト生まれでコロマンデル商館長 (Jacob Fransz de Witt) の娘であり、フランドル系と思われる。

さて第12代の名総督ヨハン・マートスイケル (Joan Maetsuycker) は、バタヴィア総督として25年というVOC史上最長の在任期間を(1653~1678年)誇る。アムステルダム生まれながら、ブリュッセルに近いルーヴェン・カトリック大学で法律を学んだ人物で、当時のVOCの高官としては珍しいカトリック教徒であった。彼も生い立ちが不詳の人物であり、父母の名前や生地さえ明らかで無い。彼は二度結婚し、妻の姓は (Berckmans と Abbema)、どちらもフランドルのものである。後者 (Abbema)

---

(3) カロンはフランスから逃れたユグノーの両親の間に避難先のブリュッセルでちょうど1600年に生まれた。平戸で死去した三浦按針と入れ替わるように1620年夏に来日し、流暢な日本語を駆使して、タイオワン事件などを通じて頭角を現した。絶体絶命の平戸商館取壊し事件(1639年)を奇跡的に上手く乗り切り、オランダが江戸の時代を通じて日本と貿易をする基礎を作った。バタヴィアでも次席(商務総覧)にまで登りつめ、ファン・レインの後継として総督の座さえ視野に取めたが、結局は果たせなかった。引退後はライデンで過ごしていたが、世紀後半になりフランスの財務総覧コルベールに招請され、1664年に再建された仏東インド会社の理事として再び、東インドの海に舞い戻ってきて、インド等で活躍した。その著『日本大王国誌』(幸田成友訳著、東洋文庫)は、ケンペルの『日本誌』(後述参照)が出るまで、17世紀以降に欧文で書かれた唯一の日本に関する文献であった。カロンの家系については後述参照。



オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

の前夫はアンボン知事（Simon Cos）であり、さらに彼女の母の姓（du Vayer）も、いずれもフランドルを指し示す。

第13代総督はレイクロフ・ファン・フーンズ（Rijcklof Volckertsz. van Goens）である。ドイツ生まれで、van Goensからは特定が困難だが、父の姓を示す Volckertsz. はフランドル的である。彼は二度結婚し、ライデン生まれの最初の妻の名前は（Jacomina Bartolomeus Roozegaard）、きわめてフランドル的である。本人の長男の妻（Louisa Brasser）、次男の妻（Joanna Christina Sas van den Bossche）の名前の Brasser と Bossche がともにフランドルの姓である。血脈的にはフランドル系の家系と言える。

14代目のコルネリス・スペールマン（Cornelis Jansz Speelman）は、アントワープ出身者が多く移住したロッテルダム生まれであり、Speelman が典型的なフランドルの苗字である他、Jans も Cornelis もフランドルを示唆する。父（Jan Cornelis Speelman）が南ホラントの出身で、きわめて珍しい姓の母（Hadewich Wittert）はロッテルダム生まれであり、その父方の祖父母の姓（Speelman と Cornelisdr）等、全てがフランドル的である。息子（Johan）の妻の名前（Debora Kievit）も同様である。第23代出島商館長ウインニクスは、義理の兄に当たる（後述参照）。

第15代総督はヨハネス・カンフホイス（Johannes Camphuys）は、何らの氏素性に関する家系情報が残っていないし、名前からも南北のいずれかを特定しにくい。ハールレム生まれで、インドネシアに骨を埋めている。17世紀後半には三度にわたり出島商館長を務めており、後に7年間、バタヴィア総督も務めたわけで、VOC 上層部からは評価の高かった人物なのであろう。後年、バタヴィアではかつて慣れ親しんだ日本風の家に住んだという。また有名な『日本誌』を書かせるためにケンベル（後述参照）を派遣した学識派の人物でもあり、そのケンベルとはラテン語で交信した。相当高い身分の教養ある人物であったと見られる。その姓が Kamphuis でなく、Camphuys とされていることは、示唆的ではある。

## 16. 18世紀のVOC総督 独占はさらに強まるのか

こうして17世紀も後半に深く入ってくると、新生オランダは、イギリスとの度重なる抗争から最盛期をすでに過ぎ、他方で前の世紀後半の混乱



期に難を逃れてやってきたフランドル人たちもさらに代替わりし、その親たちでさえオランダで生まれた若い第三世代が台頭し現地に溶け込んでくる。しかし18世紀においても、その家系や名前からルーツがフランドルと思える人物には事欠かない。しかも東インド生まれの総督を見る時代に入っていく。以下、世紀を跨いで赴任したファン・アウトホールン以降について簡単に見ていこう。

第16代総督はウィレム・ファン・アウトホールン (Willem van Out-hoorn) であり、彼は東インドのマルクで、バンダ長官であった父と母 (Agnetha Thielmans) の間に生まれた。父はハーグ生まれで、父の姓と母の姓はともにフランドルのものである。二代にわたる VOC の家系であり、弟コルネリスも長崎で商館長を務めている。娘の Susanna は、次の総督であるファン・ホールンに嫁いでいる。

第17代総督はそのファン・ホールン (Joan Pietersz van Hoorn) であり、アムステルダム生まれである。父 Pieter は、爆薬製造会社を営し、祖父 (Jan Jansz van Hoorn) や祖母 (Meyntge Pietersdr Calff) の名前は全てにおいてフランドル的である。母 (Sara Bessels) の名前もフランドルの出自を思わせるが、実は母はレインスト第二代総督の孫である。ホールンは三度結婚しており、最初はフランドル姓の妻 (Anna Struys) と、二度目は上記ファン・アウトホールン前総督の娘スザンナと、最後に、これもアフリカの英雄リーベックの息子にして次のパタヴィア総督アブラハム・ファン・リーベックの娘ジョアンナである。

第18代総督アブラハム・ファン・リーベック (Abraham van Riebeeck) は、有名なケープ総督ヤン・ファン・リーベック (Jan van Riebeeck) の息子として、ケープで生まれている。父親ヤンはトンキンの商館長なども務め、1643年には出島にも滞在している。1652年からケープ植民地の総督となり、英雄となった。父のヤンはキューレンボルフに外科医の息子として生まれ、母親 (Elisabeth Goverts van Gaesbeeck) はフランドル系である。ヤンは二度結婚しており、アブラハムを生んだヤンの妻はマリア・ドゥ・ラ・キュイルリー (Maria de la Queillierie) でロッテルダム生まれだが、その父親 (Abraham Quevellerius) がフランドルのトゥルネー出身、母親 Marie du Bois はフランス出身で、どちらもユグノーであろう。したがってアブラハムの母語はフランス語である。息子アブラハムの妻 (Eisabeth van Oosten) もフランドル姓である。「アフ

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

リカの英雄」のオランダ人というイメージからは意外だが、ファン・リーベック家はフランス語系フランドル家系である。

第19代のクリストッフェル・ファン・スヴォール（Christoffel van Swoll）、アムステルダム生まれ。混乱の時代を反映してか家系図は不明であるが、Swollがフランドルの姓であり、妻の前夫（Jan Torant）の家系に見られるの姓（de Roo, Durven, Carel, Houdijk, van Mierop等）からして濃厚なフランドル系と考えられる。

第20代ヘンドリック・ズワールテクローン（Hendrick Zwaardecroon）、ロッテルダム生まれ。Zwaardeもcroonも、さらには母の姓Heulen、父方祖母の姓van den Broeckeもフランドル姓である。家系に見えるBarendrecht, van Galen等も同様である。

第21代マテウス・デハーン（Matheus de Haan）、ドルトレヒト生まれで、家系はほとんど不詳である。De Haan姓自体はオランダ的であるが（フランドルならde Haenという古い綴り）、綴りの揺れに過ぎず同音異綴である。Matheusは姓とするなら、きわめてユダヤ的な姓である。母の姓（van Wijngaarden）、娘の夫がミッデルブルフ生まれのアンボン長官（Versluys）でいずれもフランドル姓である。

第22代ディーデリク・ドゥルフェン（Diederik Durven）、デルフト生まれで、上記総督van Swollの血の繋がらない親戚である（Durvenの後妻の前夫の母の配偶者がvan Swoll）。Durvenをはじめ、母の姓がvan Mierop、二人の妻の姓はvan Bredaとde Rooであり、家系はフランドルの姓に溢れている（van Brendrecht, van Dussen, van der Meer等々）。とりわけデルフト出身、リーフデ号で日本にやって来て、「八重洲」の語源となったヤン・ヨーステン（van Lodensteyn）が三代前親戚（妻方）にいる。

第23代ディルク・ファン・クローン（Dirck van Cloon）、バタヴィア生まれで、家系はほとんど不詳、本人の姓からも出自は特定できない。母の姓（van der Walle）や本人の妻の姓（Lengele）がフランドル姓で、妻は後にケープ総督（Pieter Rochus Pasques de Chavonnes）と再婚しており、これも同様にフランドル系である。

第24代アブラハム・パトラス（Abraham Patras）、グルノーブル生まれのフランス系で、兄弟の名などからも（Antoine, Isabeau）、フランス語を常用する家系である。Patrasの姓は由来が不明である。父方祖母の

Brunel、母方祖母の Ruelle がフランドル姓である。その他、家系に見える姓 (Royer、Brun、Blusset、Brakel 等) がフランドル系を示唆する。

第25代アドリアーン・ファルケニール (Adriaen Valckenier)、フランドル的な姓の父方の出自は今一つ明らかでないが、家系に見える典型的なフランドル姓 (Ranst、Carel、Tengnagel 等々) に加え、4代前から上述の「アムステルダム9人」の Pauw 家にも繋がる VOC 関係の名門一家であり、母の Pellicorne 家はアントワープ出身の名門であり、同じフランドル出身の家系 (du Bois、Thibaut、van den Bossche 等) と繋がっている。

第26代ヨハネス・テデンス (Johannes Thedens)、ドイツ生まれで、Thedens もドイツ式の姓と思われるが、母の名前以外、家系は一切不明である。スペックスやブラウウェル、カンブホイスに続き、先に長崎の商館長を歴任 (1723~25) して VOC 総督に就任した、4人目にして最後の人物である。母の名前に含まれる Pietersdr. がフランドルを示唆する。二人の妻が Moerbeek と Goossens で、いずれもフランドル的である。とりわけ後者は、その母の Fauconnier というフランドル的な旧姓や、アントワープの豪商 Coymans の血を引く出自からして、さらにはその前夫が台湾長官で、カロンの親戚でもある Frederick Coyett の孫であること等からしても、Goossens もフランドル系であろう。

第27代ギュスタフ・ウィレム・ファン・イムホフ (Gustaaf Willem van (von) Imhoff)、ドイツ出身で、ユダヤ系であり出自を特定し難いが、母方 (Boreel 家) がフランドル姓であり、さらにはアントワープの豪商 Coymans や「アムステルダム9人」の Carel や Grootenhuys に直接繋がり、まさに VOC の本流の一族と見做せる。

第28代のヤコブ・モッセル (Jacob Mossel)、エンクハイゼン生まれのユダヤ系。VOC の一般の船員から総督まで登りつめた珍しい人物で、上記 Cloon 総督の庇護を受けた。Mossel はフランドルの姓。母の姓 Leydecker はもともと蘭・白・独国境のリンブルフ辺りの姓である。家系に見える幾多の姓 (van Loo、van Pla、Boom、van Laren、Joris、Landman 等) がフランドルを示唆する。妻の姓 (Appels) や子たちの姓 (Silver、Andries、Hartingh 等) もフランドルを示唆する。

第29代ペトルス・アルベルトゥス・ファン・デル・パッラ (Petrus Albertus van der Parra)、コロンボ生まれで、この姓 Parra はイベリア

出自（コンベルソ）を示唆し、ユダヤ系であろう。父の名 Cornelis Romboutsz や、父方祖母の姓 Strik、母の姓 Spanuit はフランドルのものである。ユダヤ系だけにルーマニア（Dude）、ハンガリー（Maten）等の姓と思しきものも見受けられるが、一人目の妻の姓 van Aerden、その他家系に見える Coomans、Cleuters、Haauw、Bake 等がフランドルの姓である。

第30代ヘレミアス・ファン・リームスダイク（Jeremias van Riemsdijk）、ユトレヒト出身。姓の van Riemsdijk 以外にも、父の名前（Scipio Jansz.）や母の名前（Johanna Cornelisdr. Bogaert）もきわめてフランドル的。家系に見える Eyssen、妻の姓 Helvetius、子の配偶者の姓（Isebrandus、Faber 等々）がいずれもフランドルを示唆する。

第31代のレイニエル・デクレルク（Reynier de Klerk）、フランドル人が多数移住したミッデルブルフ生まれで、一目でフランドル人と分かる名前である。父は de Clercq というスペルを用いている。もともとはフランス語の Le Clercq（ルクレール）がオランダ語に転換された姓であり、ユグノー家系であることが強く示唆される。名の Reynier もきわめてフランドル的。妻の姓（Westpalm）の由来は不明であるが、その母（Goossens）の元夫は第26代総督 Thedens であり、Goossens という姓もフランドル系であろう。

第32代のウィレム・アルノルト・アルティンク（Willem Arnold Alting）はフローニンゲン生まれで、純粋な意味では最後の VOC 総督である。Alting はフランドルの姓である。母の姓（Blencke）は、ハンガリー系の姓と思われるが（Blenke）、家系に見られる他の姓（de la Haye や Huisman）からは今やフランドル系であることが示唆される。父方祖母の姓（Leenhoff）はフランドル姓である。娘が初め Abeleven 姓の人物と結婚、その死後には後に総督になる下記の Siberg と結婚しており、とりわけ前者の家系には典型的で有名なフランドル系の人物の名前が多く見られる（van Riebeeck、Coeckebacker、Codde 等）。

以上の通り、17世紀、18世紀における VOC 総督はほぼ全員がフランドル系の人物であることが判明した。なにしろ例外は、その血縁が全く不明の第15代のカンブホイスのみである。しかもそのことはカンブホイスがフランドル系ではないとするものではない。

## 17. 19世紀のオランダ直接統治以降の東インド総督

18世紀末に東インド会社 VOC が消滅し、東インドが19世紀にはオランダ政府の直接統治に移行してからも尚、フランドル系の総督がズラリと名を連ねている。「VOC 総督」から「東インド総督」へと身分が変わり、貿易面の役割が減じ、むしろ大使のような外交的な役割が求められたからか、フランス語をも話すフランドル系の上流階級からの派遣がさらに増えた印象すら与える。以下、簡単に姓のみをカタカナで示し、家系の特徴を付記する。

33 ファン・オーフェルストラートン (Pieter Gerardus van Overstraeten, 1796–1801) : 最後の VOC 総督であり、最初の東インド総督でもある。本国がフランスの脅威に晒され始め、激動の時期の始まりに総督を務めた。北ブラバント出身で、Overstraete と同一とするならフランドルの姓。Gerard は、Gerrit に相当するフランス語の姓で、フランドル的。さらに母方両親の姓が Aelmans、Pets、父方祖母の姓は Schoorts、妻の母の姓が Franchimont、さらにその母の姓が Le Grand で、完全にフランドルの家系である。

34 シーベルフ (Johannes Siberg, 1801年–1805年) : ロッテルダム生まれ。「バタヴィア共和国」から任命された総督で、本国からの統制が緩み、汚職等、東インド統治は迷走した。母の両親の姓が Jalink と Pothof、妻が上記 Altin 総督の娘、息子ピーテルの二度の結婚の相手は、第二代総督レインストの末裔であり、いずれもフランドル家系である。

35 ヴィーゼ (Albertus Henricus Wiese, 1805–1808) : 本国の混乱に応じて、「バタヴィア共和国」の最終年に総督就任、1806年、母国は「オランダ王国」へと変遷を重ねた。ドイツ・ブレーメン生まれだが、家系は詳らかでない。Wiese という姓はドイツともフランドルの姓とも取れ、母の姓 Dreyer も同様だが、祖母の姓が Coomans でフランドル系である。最初の妻 Lodisio は、二代前の総督 Overstraten 夫人であった。二人目は Marci という姓でフランドルの姓である。兄弟6人のうちの4人の配偶者の中にはフランドル姓が多い (van Gaasbeek, van Basel, Motz)。

36 ダーデルス (Herman Willem Daendels, 1808–1811) : ナポレオン三世が任命した親仏の総督であり、オランダで死刑の判決を受け、フラ

ンスに亡命していた時期もある。Daendels の姓は由来が不明であるが、父方の家系に見られる姓（van Hattem、van Wijck 等）、また Tulleken 姓の母の家系の姓（Wijnen、L'Empereur 等）からもフランドル系であろう。妻の両親の姓（van Vlierden と Greve）も同様である。そもそも本人の名前 Herman Willem もフランドル的である。

37 ヤンセンス（Jan Willem Janssens、1811年）：バタヴィアに赴任して間もなくオランダはイギリスに屈した。下級貴族で軍人出身だが、父方系図はほとんど不詳。Janssens は南北にわたって存在するが、人口の少ないフランドル側に遥かに多くが存在する。母の姓（Rees）もフランドルの姓である。母方や子の系図に多くのフランドル系の姓がある（de Haen、Lammen、Verkolje、van Voorst、de Clercq、Rombouts 等々）。

英国統治（1811～16年）

38 ファン・デル・カペレン（Godert Alexander Gerard Philip van der Capellen、1816—1826）：有名なラッフルズ等によるイギリス統治を挟み、オランダ統治が復活した。ユトレヒトの名門で名前も複雑極まりないが、Capellen、Godert、Gerard のそれぞれがフランドル的である。さらに父方の家系に見える姓（Eng、van der Schuyren、Zuylen、van der Oye、d'Aspremont）、母方に見える姓（Bloys、Clignet、de Casembroot、van der Aa）、妻の家系の姓（Fagel、van Goor）等々、すべてにおいてフランドル的な家系である。

39 デ・コック（Hendrik Merkus de Kock、1826—1826）：もともとは de Cock と綴っており、職業のコックを意味するフランドル姓。母の両親の姓が Merkus と Vaster で共にフランドル姓。その他、家系に多くのフランドル姓が見られる（Aerts、Bartholomeus、Colijn、Leendert、Lee-mans 等々）。

40 ドュピュス・ド・ジシニユ（Léonard Pierre du Bus de Gisignies、1826—1830）：フランス国境に近いムスクロンで生まれ、アントワープで亡くなった生粋のワロン系フランドル人である。Du Bus やコルトレーク生まれの母の姓 Vuylsteke、妻の De Deurwaerder 等々がフランドルの姓である。

41 ファン・デン・ボッシュ（Johannes van den Bosch、1830—1833）：van den Bosch という姓は、今ではオランダとベルギーの双方に同程度存在しているが、元来、ベルギー・ブラバント地方のメッヘレン辺りの姓で

ある。元々のブラバント地方（旧ブラバント侯爵領）の北部（北ブラバント）は、現在のオランダに編入されており、その地域の姓は、南北の出自を最も判別しにくい。父方の祖母の姓は de Laet で、その曾祖母は Portier で、いずれもフランドル的である。母の姓 (Ponningh) からは判断できないが、母方祖母は Kessel と van Brugge という両家出身で、フランドル的である。さらに、本人の二度の結婚の妻の姓である de Sandol-Roy と de Sturler であるが、家系図に見える姓からは（前者は van Schoor、Perrot、Deroy、後者は Leeuwens、Buirette、Seulin 等々）、フランドル系であろう。

42 ポート (Jean Chrétien Baud, 1833—1836) : 南ホラント出身。Baud がフランドルの姓で、母の姓 Le Brun もユダヤ的なフランドル、フランスの姓である。総じてフランス語を常用するフランドル家系である。

43 デ・エーレンス (Dominique Jacques de Eerens, 1836—1840) : アルクマール出身で、祖父までしか系譜を辿れない。本人の Jacques も Eerens もフランドル的な姓である。Dominique という名も、フランス語を常用するフランドル家系を、さらには子たちの配偶者名もフランドルまたはフランス的な家系を示す (Bonhomme、d'Epinois 等々)。

44 ファン・ホーヘンドルプ (Carel Sirardus Willem van Hogendorp, 1840—1841) : インド生まれ。本人の Carel、Willem がフランドルを示唆し、妻はフランス・ロレーヌ地方出身で、姓の Olivier はユダヤ系かつフランス語系の姓である。父方の家系を中心に、夥しい数のフランドル姓が見られる (van Santen、Meermans、van Wijngaerden、de Canter、Albrecht、Bouckhorst 等々)。

45 メルクス (Pieter Merkus, 1841—1844) : 父の両親の姓が Merkus と Vaster、母はスイス生まれだが、姓は Mouchon、パートナーは Uitenbroek 姓で、いずれもフランドル姓と思われる。子たちの配偶者名には多くのフランドル姓が含まれる (Calkoen、Lodewijk、van Rees、Kruthoffer、Riesz 等々)。

46 レインスト (Jan Cornelis Reijnst (Reynst), 1844—1845) : 第二代総督の弟の末裔 (上記参照)。家系にあるフランドル姓が (Hasevelt、Radermacher、van Loon、Beeckman、Racquet 等々)、2世紀が経過してもフランドル系の間で結婚している実態を示す。

47 ロファーセン (Jan Jacob Rochussen, 1845—1851) : Rochus がフラン



ドルの姓である。他の総督に比べ、家系にはオーストリア・ハンガリー系と思われる姓も少なからず散見されるが、やはりフランドル系の姓が多い（van der Burght、Ploos、Pierraert、Mossel、Leendert、Denijsse、Fer-rand、Antoine 等々）。さらに父の通称が Jean Rochussen、また子の一人の名が Jeanne Marie、二番目の妻の姓がフランスに多い Vincent であること等から、名前の印象とは裏腹に、フランドルにルーツを持つフランス語常用者であると考えられる。

48 ドイマール（Albertus Jacobus Duymaer van Twist、1851—1856）：本人は東部ヘルターラントの出身であり、Twist は独蘭国境のドイツの町の名に由来すると見られる。家系にはフランドル姓が多い（Niel、Drabbe、van Diemen、Manteau、Overschie、Wesel 等々）。母の姓 van Loghem は、もとは van Lochem と綴るフランドル姓である。父方の家系を六代前まで遡ると、17 世紀初頭生まれの Pons van Twist から、ライデン生まれとなる。宗教改革の過程で、フランドルからドイツを経てライデンに落ち着いた家系であろう。

49 パフッド・ド・モルタンジュ（Charles Ferdinand Pahud de Mor-tanges、1856—1861）：本人はアムステルダム生まれだが、父はスイス・ローザンヌ生まれであり、Pahud 姓はスイスに多い姓である。母の姓 Walther もスイス・ドイツ的だが、父方祖母の姓が Curchod、妻の姓が Bogaardt であり、娘の夫の姓 Vincent、息子の妻の姓 van Es 等とも相まって、スイス姓の割にはフランドル的な家系である。なお母の Antoinette、祖母の Jeanne Marie 等々、親族の名からもフランス語を常用する家系であることが分かる。

50 プリンス（Ary Prins、1861—1861）：暫定総督であり、次のヴェルトの次にも再登板するが（1866—1866）、その記載は省略。父母は家系図が全く不明であり、それらの姓（Prins、Hamel）からは出自が特定できない。本人はロッテルダム近郊のスヒーダム生まれであるが、最初の妻の姓が Pietermaat、二番目が Leeuw であり、また家系のなかの姓（Duym、Verboom、Sandijck、Ameijde、Pichot、Patijn 等々）から、フランドル系と見られる。8 人の子の 8 人の配偶者名のなかにも、「バイラントの自由<sup>(4)</sup>」で有名な Vaillant 姓が二人、Schaap 姓が二人、その他のフランド

---

(4) 「バイラントの自由」という言葉があり（例えば岡崎、184 頁）、オランダ独

ル姓が見られる (van Raders、van Beckfelt 等)。また子たちの名からはフランス語を常用する家系であることもうかがえる。

51 ヴィルト (Ludolf Anne Jan Wilt, baron Sloet van de Beele, 1861—1866) : 爵位を持った家系であるが、本人の姓や父母の姓からは、南北の確定は困難である。父親側の系図を可能な12世紀末まで遡れば、van Heusden、van der Sluse にまで辿れ、始祖からフランドル姓で始まる。それ以降、フランドル姓が多く見られる (Everhard、van Hattem、van Apeldoorn、van Echten、van Broekhuysen 等々)。母方の父・祖父世代だけでも、多くのフランドル姓に出会う (Bartholomeus、Gerardus、Colijns、Joachims 等々)。

53 メイエル (Pieter Mijer, 1866—1872) : バタヴィア生まれで系図がまったく不明であるが、本人のフランドル姓に加えて、母の姓 Meyer、さらには妻の両親の姓からして (Pietermaat と Ringeling)、フランドル家系である。さらには子たちの配偶者名にもフランドル姓が多い (van Raders、Vaillant、Drossaers、Coster 等)。

54 ルドン (James Loudon, 1872—1875) : 父、祖父はスコットランド生まれ、本人はハーグ生まれで、Loudon はユダヤ的なスコットランドの姓で、オランダ・カンペン生まれの母の両親の姓がフランドル姓 (Valck と Beijl (Beyl)) である。兄弟たちにも典型的なフランドル姓の配偶者がいる (van Pallandt、de Kock、van Leeuwen など)。妻の家系も祖父がアントワープ出身であり、完全なフランドル系である (両親の姓は de Stuers、de Kock)。

55 ファン・ランズベルヘ (Johan Wilhelm van Lansberge, 1875—1881) : コロンビア生まれで、南仏マントンで死去。Lansberge はフランドルの姓と見られる。父の系図を遡ると、7代前のフィリップスがフランドルのゲント出身である。その後、ゼーラントのフースやハーグへ移住しており、祖父はドイツ・ケルン生まれ。三代前に van Heurn、4代前に van

---

立戦争の際、敵のスペインに武器弾薬を売り渡し、裁判でも「貿易の自由」を堂々主張して無罪を勝ち取った商人 (Vaillant) を揶揄する言葉。戦時中でも貿易の必要性は自明であり、実際は対スペイン徹底抗戦やフランドル奪還を強硬に主張するオラニエ公に反対する、和平 (停戦) 志向の都市貴族や大商人の立場を代弁している。北フランス・フランドルに多い姓であるが、バスク等、イベリア半島が出自のユダヤ系の姓と思われる。

Wouw というフランドル姓の配偶者がいる。母も妻もユダヤ系と思しきコロンビア人。

56 ス・ヤコブ (Frederik s'Jacob, 1881—1884)：家系の中で一番古い17世紀のレニエ (Renier) はフランス出身でデルフトで死亡しており、ユグノー家系と思われる。母の姓がローフセン (上記47代の総督 Jan Jacob Rochussen の兄弟)、父方祖母の姓が Creeft、配偶者はパ・ド・カレーのサントメール出身のレオニー (Leonie) で両親の姓が Willem と Olivier、家系には多くのフランドル姓が見られ (Keunen, van Santen, Wijngaerden, de Canter 等々)、名前の印象とは裏腹にフランドル・フランス系と見なされる。

57 ファン・レース (Otto van Rees, 1884—1888)：ナイメーヘン生まれで、父方の系譜は殆ど不明。Rees はフランドルの姓であり、母方の祖母 van der Gon 姓もフランドル系であるが、祖父は Holmberg というスウェーデン人である。家系を見ると、フランドル姓が現地スウェーデン語化している (Kraåk, Jäger, Bröms, Ahlberg 等々)。なお狭い範囲での婚姻が通例だったためか、妻は、上記53代総督メイエルの子の姪。

58 ホールデイク (Cornelis Pijnacker Hordijk, 1888—1893)：教授・博士という肩書を持つ学識派であり、ロッテルダムにある珍しい姓である。Pijnacker はフランドル的であり、同時代の画家にフランドル系と思われるアダム・ペイナッケルという人物がいる。母の姓 van Wijk も、母方祖母の Voorthuizen 姓もフランドル系である。妻も、家系に見える姓からして完全なフランドル系である (de la Coste, Vernes, van Toulon, van Nispen 等々)。

59 ファン・デル・ヴェイク (Carel Herman Aart van der Wijck, 1893—1899)：名前を構成する全ての要素がフランドルを指し示す。さらには母が de cock、van Leeuwen 両家出身で、父方祖母は van der Muelen、曾祖母が Brouwer、母方祖母の姓が Reynst、妻の旧姓が van den Broek で、非常に濃厚で重厚なフランドル家系であると言える。

60 ローゼボーム (Willem Rooseboom, 1899—1904)：アムステルダム生まれ。本人の姓 Rooseboom、母の姓 Waller、さらに二人の配偶者名 Escher、Pit はいずれもフランドルの姓と思われる。その他、家系に見える幾多の姓も同様である (de Clercq, de Goye, Amsingh, Marinus, Leendert 等々)。

61 ファン・ヘーツ (Johannes Benedictus van Heutsz, 1904—1909) : ドレンテ生まれであるが、Heuts がフランドルの姓であり、母の姓が Kocken、妻の姓も van der Zwaan で、フランドル系の家系である。家系に見える他の姓も同様である (Bijkerk, Duijtz, Deken, Ansoms, de Ruijter, Kijper 等々)。

62 イデンブルフ (Alexander Willem Frederik Idenburg, 1909—1916) : ロッテルダム生まれ。Idenburg の姓の由来は不明であるが、父方祖母の姓が Jonker、母の姓が van der Hegge Spies、妻の姓が Deutz で、また家系にある幾多の姓からもフランドル系の家系であろう (Pelgrim, Verroten, Rutgers, Middelberg, Waardenburg 等々)。

63 パウル (Johan Paul van Limburg Stirum, 1916—1921) : ズウォール生まれ。第二代総督のレインスト家から妻を迎えている。祖母の姓が van der Wijck、母は Nobel 家と Sandberg 家の出自で、祖母が Westerveldt 家なので、ユダヤ系で、かつフランドルの出自と思われる。家系にある姓もフランドルを示唆する (Baerdt, Jochems, Princen, Jonckheyn 等)。

64 フォック (Dirk Fock, 1921—1926) : 両親の姓 Fock、Uytenhooven だけでなく、家系中に幾多のフランドル姓が見られる他 (Bondt, de Bree, de Clerq, Wijma, Mangelaar 等々)、母方祖母の Ermerins などルーツがフランスのノール県に遡る。

65 デ・フラーフ (Andries Cornelis Dirk de Graeff, 1926—1931) : 父の両親の姓 de Graeff と Engels (後者のルーツは南仏ニームから移住した Pierre d'Ange)、母の両親の姓 Roijer と Mulert、妻の両親の姓 van der Wijck と van den Broek はいずれもフランドルの姓である。家系を見渡すと多くのフランドル姓があるが (De Coninck, van Appeldoorn, de Baecke 等々)、例えば父の兄弟に、Gijsbert Carel Rutger Reinier de Graeff という人物もおり、誇示せんばかりに全てがフランドル然とした名前である。なお父 Dirk は、バタヴィアの赴任の前に、東京に3年ほど外交団の一員として赴任しており (後述参照)、Koyama Otjo という日本女性と結婚している。注目すべきは、このデ・フラーフの先祖に、17世紀のオランダ全盛期を反オラニエの議会派として有名な巨魁デ・ウィットとともに指導し、オランダ政界に君臨したコルネリス・デ・フラーフがいることである。

66 コルネリス（Bonifacius Cornelis de Jonge、1931—1936）：フランドル姓 Cornelis の父方の家系を 15 世紀前半まで 12 代にわたり遡ると、ゼーラントの Lieven というフランドル姓の人物がいる。家系にはフランドル姓が多く見られる（de Witte、Boye、Kinschot、Philipse、van Kretschmar、de Cocq、van Lisse、de Porte 等々）。さらに妻の家系を辿ると、Halewijn、Wassenaer というフランドル姓が続き、最後はゲントにまで辿り着く。

67 チャルダ（Alidius Warmoldus Lambertus Tjarda van Starkenborgh Stachouwer、1936—1942）：きわめて難解な姓名であり、オランダ北部のフロニンヘンを地盤とする家系である。ただし家系にはフランドル姓も少なからず見られる（Echten、Galle、Talma、de Bye、Douwe 等）。他方、母の姓は Quintus で、家系には他にもフランドルの姓が見られ（Roor-da、Jonckheer、Modderman、de Sitter 等々）、両家は総じてフランドル系と見なしうる。

68 ファン・モーク（Hubertus van Mook、1942—1948）：東インド・セマランの生まれ。父方の Mook、Mol という姓、母方の Bouwman、de Wit という姓、妻の家系の姓（Maureau、Molanus、Wagemaker 等）、それ以外に見られる姓（Elschot、Geld、Janse、Ignatius 等々）からして典型的なフランドルの家系であると見られる。

#### 日本統治（1942～45年）

69 ベール（Louis Beel、1948—1949）：リンブルフ生まれ。Beel という姓や、母の姓 Rutten、妻の姓 van der Meulen はいずれもフランドルのものであろう。その他、家系に見える姓から（Emons、Reynen、Henckens、Lucker、Mulders 等々）、濃厚なフランドル系と言える。

70 ロヴィンク（A.H.J. Lovink、1949—1949）：ハーグ生まれ。本人の姓 Lovink、母の姓 Aalders がフランドルの姓であり、また家系に見える幾多の姓からも（Wals、Elsman、Mulder、Huetink、Liefink 等々）、この一家はフランドル系である。

## 18. 東インド総督の座を占め続けるフランドル系とユダヤ系

上記から明らかなように、初めバントゥンに、後にバタヴィアに VOC 総督府が置かれて以降、インドネシア独立（1949年）に至るまでの全ての総督は、計 70 代 68 人にわたり、そのうち 67 人がフランドルに少なから

ぬ血縁を有する人物によって占められていることとなる。この尋常でないフランドル系人材の登用は、何を意味するのだろうか。当時は「独占」が社会規範であり、貿易でも結婚でもいわゆる「身内」「仲間」同士で行うものであることは前編で既に述べた。ここでは社会的な要素である「ユダヤ系」という問題を付け加えておきたい。典型として武闘派の総督クーンの例だけでなく、オランダ大航海時代のなかで綺羅星の如くユダヤ系の人材が散りばめられているからである。

レコンキスタに至る過程で、イスラム統治下の時代からイベリア半島に多く住み、次第にキリスト教の版図に組み込まれても、勢力を拡大していたユダヤ人への迫害が、改宗や追放という形で進行した。なにしろ例えばイザベラ女王の3人の秘書官が皆、改宗したユダヤ系であったほどに、中枢にも多くの人材が入り込んでいた（飯塚、110頁）。改宗したユダヤ人は、スペイン語でコンベルソないし蔑称的にマラノと言われ、他方、改宗しないユダヤ人も当然多くいた。1492年の新年早々、レコンキスタ完成の段階でのカスティリーヤの人口約700万人のうちの4%強がユダヤ人ないしコンベルソであったという（同上書、106頁）。しかし同年3月末のユダヤ人追放令により、改宗しないユダヤ人たちが一斉にスペインの地を追われることとなった。バレンシア、バルセロナ、マラガ、カディスなどの港町を目指すユダヤ難民の馬車で街道がひしめき合ったという。多くは陸路で脱出でき、気候・言語なども似ている隣国ポルトガルへ逃げ延びた（小岸、18、19頁）。16世紀にポルトガルの東インド貿易を担ったのは主としてユダヤ系の商人たちであった。しかしそのポルトガルでもその僅か5年後にはジョアン二世から従弟のマヌエルへの国王交替により、追い出される運命にあった。多くは改宗して残留を希望し、こうしてポルトガルは世界で最も多くのユダヤ系住民を抱えることとなった（同上書、20頁）。改宗を拒否した敬虔なユダヤ人を中心に、今度は当時ヨーロッパで最も栄えており、カール五世が1526年の布告で異端裁判を行わないと約束していたアントワープに移住したのである。

ところでレコンキスタ成就と同年のコロンブスの航海に支持を与え、資金も多く提供したのが、コンベルソを含むユダヤ人たちであったことも、至急、安住の地を探し求めなければならない状況に追い込まれた背景を考えれば、当然のことであつたらう。ただしレコンキスタの時代と、ほぼ一世紀後のオランダ海外進出、そして黄金時代の際の状況を同一に考えるこ

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

とは出来ない。宗教戦争とオランダ独立戦争の過程でフランドルからさらにオランダに移住したユダヤ人・系（コンベルソのプロテスタントを含む）たちは、安住の地オランダの繁栄を享受していて、更なる安住の地を求めて VOC の活動を展開し参加したわけではなく、徹頭徹尾、貿易目的であった。現にクーン総督などは、オランダ人の若者の植民者を東インドに送るよう本部に繰り返し求めていて（永積昭、88 頁）、多くが数年滞留して貿易で一儲けは企んでも、暑くて不衛生な地である東インドを安住の地と考えて定住するオランダ人はほとんどいなかったのである。

それがゆえに他方で、東インドでの独占的な貿易一辺倒の政策に異を唱え、1621 年以降（西蘭休戦協定終了後）の北米植民を提唱したのが、これもフランドル系のウッセリンクス（Willem Usselinx）などの西インド会社の主導者である。ここでもニューアムステルダム（現ニューヨーク）に移住開始したのは主としてフランス語話者のワロンの農民たちであり、この段階では必ずしもユダヤ人が新大陸に殺到したわけではまったくない<sup>(5)</sup>。

## 19. 平戸オランダ商館を初期に担ったのは誰なのか 三浦按針の関り

さて VOC・東インド総督に続いて、長い江戸時代のほぼ全期間継続した日蘭貿易に重要な役割を果たしたオランダ商館長を検討するが、その前に、イギリスのそれについても触れておこう。なぜならオランダはマヒュー船団のリーフデ号の日本到来を契機に対日貿易の機運が芽生えたわけだが、そのリーフデ号の航海士は有名なウィリアム・アダムス（日本名三浦按針）で、イギリス人だったからである<sup>(6)</sup>。家康に寵愛された按針は、スペックスと協力して、平戸にオランダ商館を立上げた（1609 年）。後に本国イギリスからセーリス司令官が来航した際に、イギリス商館の設置にも重要な役割を果たした（1613 年）。公式にもオランダが蘭商館を、イギリスが英商館を設置したのは事実だが、そのどちらの設置についても

---

(5) オランダ領ブラジルが1654年にポルトガルによって奪取され、住処を失ったユダヤ人23人がニューアムステルダムに移住したのが最初の北米オランダ領入植である（同年にオランダからも二人）。

(6) リーフデ号にて豊後に到着した24人の乗組員のその後の動静については、森『リーフデ号』参照。



実質的な立役者は按針なのであり、現に彼は、蘭商館が出来るとそこで働き、また英商館が出来るとそこでも働いた。もっとも英商館は経営難で10年間で撤収した。

按針本人はその受洗記録から、対岸フランドルとの毛織物貿易の拠点ケント州ジリングムで1564年に生まれており、父親の名前（ジョン）以外、その家系に関しては地元でも全く不明である。しかし岡山の牛窓港で会ったオランダ使節に対して按針は、オランダを自分の祖国と思っていると発言しており、彼はオランダ語を喋るだけでなく、読み書きも出来、平戸にオランダ商館が出来ると、初めはそこで働いた<sup>(7)</sup>。混ぜこぜではあったが、ポルトガル語とスペイン語も話した。あるスペイン人宣教師は按針に関して、外見だけではスペイン人修道者でも欺かれてしまうとしており、外見的にもイベリア風だったようだ。下述の同国人セーリスなど、アダムスはいつ「イスパニア人やフランドル人」に寝返るか分からないと、同国人と距離を置く按針を批判している。按針本人は自らの姓を Adams ではなく Adames（アダメス）と多く綴っていて（同僚コックスによる『商館長日記』でも同様）、これはイングランドでは南東部沿海、ケントと隣り合うサセックスに偏在する姓であり、もともとはバスクを中心とするスペインや、ドミニカ等、植民地である中南米諸国に多い姓である。つまり按針も、イベリア半島にルーツを持ち、フランドルからブリテン島に渡っていったコンベルツのカルヴァン派家系の可能性がある<sup>(8)</sup>。

他方、1613年に平戸に来航、平戸にイギリス商館を設置したイギリス東インド会社第8航海の船団司令官ジョン・セーリスは日誌に<sup>(9)</sup>、ライバルであるオランダ東インド会社の活動全体を主としてフランドル人が担っているかの如く、「フレミング」「フレミッシュ」という呼称を多用している。オランダ商館の貿易活動は、傍目にも主にフランドル人が活躍する場だったのだろう<sup>(10)</sup>。セーリスが対日全権特使として来日したのは、

(7) クレインス「オランダ商館のためにも尽力した「按針」」225頁（『三浦按針の謎』所収）

(8) 拙稿「アダムスの出自の謎を読み解く」300頁（『三浦按針の謎』所収）

(9) <https://archive.org/details/captainjvoyageof00sarich/page/n105/mode/2up?view=theater>

(10) ポルトガル人も VOC のオランダ人を「フランドル人」と呼んでいる（森『三浦按針』264頁）。

彼が32、2歳の頃で、それなりの背景があるものと思われるが、Saris という名は、もともとフランドルの姓であり（サリス<sup>(11)</sup>）、家系はジェントリーの身分である。そしてセーリスが任命した初代かつ唯一の英商館長リチャード・コックスも、フランドル系である可能性がある<sup>(12)</sup>。歴史的にはノルマンの征服以降、フランドル人はブリテン島に数次にわたり大挙して移住していて、イギリスにとって最大の人口供給元であり<sup>(13)</sup>、大陸にルーツがあり、もともと国際的な都会のエリート商人が、イギリス船団を率いて日本にやってくるまでも何ら不思議はない。

こうして新教国家オランダやイギリスの江戸日本における貿易の開始に際して、フランドル系の人材が大きな役割を果たしたことになる。以下詳しく述べていくオランダはもちろん、イギリスでもホーキンス・ドレーク・キャベンディッシュの三大航海家（海賊でもあるが）をはじめ、東インド会社や英海軍の創設に関わった人物など、有名な船乗りや海運関係者はその多くがノルマン系かフランドル系である<sup>(14)</sup>。

さて話をオランダに戻して、歴代オランダ商館長のうち初期の平戸商館長を見ていくと<sup>(15)</sup>、初代商館長（かつ三代目商館長に再任）のジャック・スペックスと二代目商館長のヘンドリック・ブラウエルの出自については、上のVOCバタヴィア総督の箇所ですでに述べた。

第4代目レオナルド・カンパス（Leonard Camps）は、出自が不明な人物で、姓と名のどちらももともと古フランス語起源の名前で、その姓

---

(11) <http://www.americanlastnames.us/S/SARIS.html>

(12) 拙稿「帰国しなかった理由を巡る一試論」119頁（『三浦按針の謎』所収）

(13) そもそもノルマン征服が、ウィリアム征服王と妻マティルダ（フランドル伯の娘）に率いられ、ノルマン人とフランドル人を中心とする連合部隊であり、彼らはイングランドで多くの領地を得て貴族となり、さらに本人自身が半分フランドル人もあったヘンリー一世が洪水で農地を失ったフランドル人を大挙してブリテン島に移住させたのを皮切りに、その後も兵士あるいは繊維業者として招かれて、多くのフランドル人が数派にわたりブリテン島に渡った。また宗教改革以降は、今度はカルヴァン派のフランドル人自ら、オランダだけでなくイングランド・ドイツに難を逃れた。中世以降、フランドルはイギリスにとり、最大の人口供給源であった。ロンドン、カンタベリー等、主要都市にはフランドル系信者のためのワロン（フランス）教会が設置された。

(14) 拙稿「アダムスの出自の謎を読み解く」288頁（『三浦按針の謎』所収）

(15) <https://www.geni.com/projects/VOC-Opperhoofden-in-Japan/16229>

は、類似の Camp、Campe を含めてフランドル的で、現にオランダよりベルギーに多い姓であり（オランダではむしろ Kamps）、また総督に宛てた対日貿易に関する提言からも貿易に深い造詣がある知的な人物であることが分かり（永積（洋）、35頁）、貿易経験が豊富なフランドル出身と強く推察される。

第5代目のネイエンローデ（Cornelis Nijenrode）は、北ホラントの城塞で有名な町ナルデン生まれで、生年や親の名など不明である。名はフランドル的で、姓からは南北の判断がつかないが、語幹の Nijen 自体はフランドルの姓である。なおネイエンローデは精神が錯乱した平戸での死の床で神を否認したので、つまり改宗ユダヤ系であったと思われる<sup>(16)</sup>。総じて、ネイエンローデもフランドルのルーツを持つと考えられる。

第6代商館長ピーテル・ファン・サンテン（van Santen）も出自が不明な人物であり、生年、生地、親の名などまったく不明である。Santen という姓はフランドルの姓である。リーフデ号の元船員で、典型的なフランドル系のサントフォールトとカトリックの日本人妻イザベラとの間にイザベラとスザンナという二人の娘がいて、サンテンはこのイザベラと結婚し、長男ヴィクトル、そしてマリヤ、スザンナという二人の娘を儲けた。長女マリヤは、後に台湾商館長も務める、フランドル系と思しきニコラス・フェルブルフ（Verburch）と結婚し、アドリアナが生まれている。孫アドリアナは、これまたフランドル系と思われる第4代台湾総督ヨハン・プットマンス（Putmans）の息子ヘラルト・ヤンスゾーン・プットマンスと結婚している。なおヘラルトの母親の旧姓はエリザベス・ファン・サンテンである。こちらのファン・サンテン家はその家系図からフランドル系と知れる<sup>(17)</sup>。

第7代商館長で、群を抜いた良識派であり、商館の公式な日誌を書き始めたクーケバックル（Nicolaes Coeckebacker）も、出自が不明な人物で

(16) 『バタヴィア城日誌 1』、145頁

(17) 幕末の海事訓練に医師として来日したボンベ（ファン・メールデルフォール）は帰国後にその経験を出版しているが（『日本での五年間』）、その出版元がライデンのファン・サンテン書店（Firma van den Heuvel & van Santen）であった（二見史郎『ファン・ゴッホ詳伝』、23頁）。フランドル人が大半を占めた町ライデンの書店であることや、共同事業者の van den Heuvel がフランドルの姓であることから、サンテン一族が17世紀から続くフランドル系で、書店を経営するような名門であることが分かる。

ある。マゼランズ・ロッテルダム会社の役員に二人のクーケバッケル（Barentsz と Claes Jacobsz、ただしアムステルダム在住）の存在が確認できる。Coucke という姓はフランドルのものだし、backer というのもユダヤ的なイギリス、オランダ、フランドルに見られる姓であり、さらに Nicolaes という名の綴りはまさにフランドルの姓でもあり、そのルーツはフランドルであろう。クーケバッケルは、下記のハーヘナールを挟み、再度来日して第9代商館長に再任されている。

その第8代のハーヘナール（Hendrick Hagenaeer）は、二年間平戸に滞在し、参府も行っている。家系はまったく不詳であるが、その姓からしてフランドル系と思われる。

この後、平戸商館の存亡の危機の際して、第10代カロンと第11代ルメールという明らかにフランドルが出自のコンビに商館長職が引き継がれていき、カロンが幕府の平戸商館取壊しの命を受け、引き継いだルメール商館長の時に商館は平戸から長崎の出島に移転するのである。商館取壊しの命令を受けたカロンの、その沈着な行動がオランダ人を救ったのであり、將軍の命令を直ちに実行したことにより、オランダがヨーロッパの国で唯一日本との貿易を保つことに貢献したのである（永積（洋）、330頁）。カロンの態度如何ではカロン殺害や平戸のオランダ船攻撃さえ準備していた、もともとキリシタンでもある大目付井上政重は、その予期せぬカロンの対応に逆に驚き、以降オランダを支持する姿勢に転じた。

フランソワ・カロンとマクシミリアン・ルメールは、本人あるいは両親がフランドルで生まれている。前者はユグノー戦争のフランスから逃れた家族出身で、VOC 船の料理見習いから身を起こした叩き上げなのに比べ、後者は、父親イサークが VOC 最大の出資者というワロン人の豪商家庭出身であり、その背景の違いが際立っている。ただし前者のカロンが貧しい家庭出身とは全く限らないことに注意が必要である。

改めてフランソワ・カロンの家系であるが、1600年、フランスから逃れたユグノーの両親の間にブリュッセルでフランソワが生まれたとしか分からず、両親の名前すら分からない。二歳年下の弟ピエールもブリュッセルで生まれているが、それ以降の消息は不明である。カロンは5人の子が生まれた20年に及ぶ平戸滞在の後、ライデンのコンスタンチャ・パウダーン（Constantia Boudaen）と結婚、彼女はアントワープ出身のブラバント州顧問官の娘であった。コンスタンチャは、Balthasar、Maria、

Susanna の 3 人の兄弟姉妹がおり、また自ら Johannes、Susanna、Balthasar の母親となった。例えば、二度結婚した娘スザンヌの配偶者を見ると、François de Civille と C.F. de Bonaventure であり、またバルタザールは Jean Pitau の娘と結婚しており、やはり子供たちもフランス語話者ないしフランドルの家系と縁を結んでいることが分かる。ちなみに姉妹のマリアは、フランドルの姓を持つ Abraham van Sonn と結婚、またコンスタンチャに付き添ってバタヴィアにやってきたスザンナは、VOC で知り合ったフランドル系スウェーデン人コイエット (Frederick Coyett、長崎および台湾商館長も歴任、注 20 参照) と結婚した。

豪商一家出身のマクシミリアン・ルメールにはついては、すでに前編で述べたのでここでは触れないこととする。ルメールの時代に商館は平戸から長崎出島に移転され、商館長も一年での交代を義務付けられた。平戸での怒涛の、かつ自由奔放な創設期を経て、長崎での、不自由な、しかし競争相手が中国だけになった安定した状況が現出したわけで、商館長の任免や役割も、高度な政治性を帯びるより、次第に、より実務的・定例的になっていったことは想像に難くない。当初、スペックス・ブラウウェル等、平戸商館長経験者が VOC バタヴィア総督を務めるケースが相次ぎ、カロンもバタヴィア総督の地位を狙う立場にあったが、それ以降は第 17 代のカンブホイスや第 28 代のテデンスを最後に、日本の商館長経験者がバタヴィアで総督を務めることも無くなった。時代が進むにつれて日本貿易の占める重みも次第に少なくなっていったことも理由の一つだろう。したがって商館長の出自を個別に調査する意義も初期に較べれば減少していくと一般には考えられ、加えて家系が知られている人物もほぼ皆無に近くなるので、本稿でも相応に扱うこととする。

以上、初期の商館長について見てきたが、来日したのは商館員たちだけではない。それ以外に、とりわけ初期にはしばしば外交特使が来日している。1609 年にローデ・レーウ・メット・パイレン号とフリフーン号が日本に初来航、二人の特使が参府して家康・秀忠に謁見し、平戸に商館を設置、スペックスを初代館長に据えた。その際の特使の一人は、アブラハム・ファンデンブルーク (Van den Broek (Broeck)) という司令官で、そのオランダ語の姓は、アントワープなど東フランダースに典型的な姓であり、「沼地」を意味している。

他の一人は江戸参府の際の日誌で有名なニコラス・コルネリスゾーン・

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

ポイク（Nicolaes Cornelisz Puyck）という司令官で、ロッテルダム生まれで、生年は不明である。Puyck はフランドル姓で、Cornelisz も同様で、かつ Nicolaes もフランドル式の綴りである。母親が Trijntje Claesdr van der Horst といい、さらに祖母も Maritje Pieterse といい、これらの名前もフランドル的である。ポイクは三度結婚している（妻の姓は Willemsdr de Lohierville, Matelieff, Jansdr de man van Heemskerck）。最初のマリア・ウィレムスドル・ドゥ・ロイエールヴィルは、フランス式の姓を有する父親の別名がこれまたフランス語風（かつフランドル式）に Guillaume（ギョーム）と呼ばれていたし、二番目の妻はフランドルとの縁が深い VOC 司令官マテリーフ（前編参照）の従姉妹である。三番目のデ・マンという姓も主にフランドルの姓であり、ポイクも明らかにフランドル系である。

さらに江戸初期に日蘭関係断絶の最大の危機であった「タイオワン事件<sup>(18)</sup>」の主人公となる台湾長官ピーテル・ノイツ（Nuyts）は、本人は 1598 年にミッデルブルフにて生まれているが、両親がアントワープ出身のプロテスタントの豪商である。ノイツはライデン大学で哲学を修め博士号を得た後、しばらく父親の商売を手伝い、1620 年にこれまたアントワープからの移民の娘コルネリアと結婚、1626 年に VOC に入った。1626 年 5 月、長男ローランを伴い、アムステルダムを出帆、バタヴィア到着後の 1627 年 5 月、ノイツは新台湾長官と日本への外交特使に兼任で任命され、すぐさま平戸に来航、江戸に参府して、その時の江戸での幕府の冷淡な処遇に憤懣を抱いたまま台湾に赴任、それが尾を引き、翌年の有名な「タイオワン事件」へと展開してゆくのである。

## 20. 17 世紀後半に商館長を務めた人物

さて 17 世紀の残りの期間のフランドルにルーツを持つと思われる主だった商館長を、名前や家系から明らかにフランドル系と思われる人物を

---

(18) 1628 年、台湾に入港した日本船を台湾長官ノイツが差し押さえたことをきっかけに発生した事件で、日本事情を熟知した、時の VOC 総督スペックスが、事件の張本人のノイツ自身を幕府に差し出す決定を下したことを幕府が高く評価し、5 年に及んだオランダ商館封鎖や日蘭貿易の中断に終止符が打たれた。



中心に幾人か拾っていきこう。

第24代のガブリエル・ハッパルト (Gabriel Happart、仏語アッパー) は元々リエージュ近郊にある名前である。彼の在任期間は、オランダ人にとっての念願が叶った朗報によって記憶されている。つまり島原の乱以降、ポルトガル人の遺体の埋葬を禁じて水葬を命じていて、オランダ人が出島に来て、それは踏襲された。これに対し歴代商館長は陸上埋葬を請願し続け、家光から家綱に代替わりした後の1654年、ハッパルト商館長の時に、出島の対岸の稲佐にある悟真寺の墓地でようやくそれを認めて貰うことが出来たのである。

また20世紀の言語紛争で有名になった言語境界線の町フーロンの市長で、オランダ語地域と指定されながら、母語のフランス語しか喋らず大きな政治問題となったアッパー氏の一族は、現在でもこの名前を背負っている (小川『ベルギー 52章』、349頁)。

第25代レオナルド・ウィンニクス (Leonard Winnincx) は、その姓名からフランドルの出身と思われ、果たしてその父セザールはアントワープの生まれである。母はアムステルダム生まれだが、母方の祖父エマニュエルがオランダの北ブラバントの出身で、さらに曾祖父・曾祖母は、Sweerts と Swers というフランドル姓である。本人の最初の妻が Helena Wonderaer で、二人目が Helena van der Heuvel といい、ともにフランドルの姓である。注目は、Helena Wonderaer の姉妹 Petronella Maria が、Cornelis Speelman の元の妻であり、ウィンニクス商館長は、第14代総督スペールマンの義理の兄弟ということになる。

第26代 (および28、30代) のヨハネス・ブーシュリオン (Johannes Bouchelion) はフランス語式の苗字であり、語幹の Bouche はフランドルの姓でもある。フランドル姓の Bouchilion と同音異綴でもある。

第37代および39代のダニエル・シックス (Daniel Six) はミッデルブルフ生まれであり、Six とは面白い名前だが、フランドルの姓である。Anthony Six と Tanneke Goethals の息子で、両方の姓がフランドルの姓である。妻の van de Wilder 姓も同様である。ちなみに同姓である、絵画「ヤン・シックスの肖像」(レンブラント) のシックスは、アムステルダム市長も務めたが、父ジャンがパ・ド・カレーのサントメールから移住したばかりのフランドル系フランス人の裕福な商人の家系である。

第38代の商館長を務めたコンスタンティン・ランスト (Constantin



Ranst) も本人はアムステルダム生まれだが、家系はブルージュの出自で、ミッデルブルフ、アムステルダムと移住してきたフランドル人一家である。父は Hieronimus Ranst といい、アムステルダム生まれ、母は Barbara Carel といい、その姓からも当然フランドルの家系である。父方の祖父はブルージュ生まれの Leonard Ranst で、祖母がアントワープの豪商一家の Constantia Coymans である。母方の祖父は Jan Jansz Carel de Jonge で、祖母が Anna Jansdr ten Grootenhuys といい、まさに母方の系図は、遠国会社を作った「アムステルダムの 9 人の商人」たちのなかのフランドル人脈の中心に位置している（前編参照）。なお第 54 代と 57 代の商館長を務めた同姓同名の人物（ただし de Jong）は、息子と思われる。

第 40 代のフランソワ・デ・ハーゼ (François de Haze ないし de Haes) は、生年・生地ともに不詳だが、姓名ともにフランドルのものである。妻は Cornelia van Dusseldorp といい、ミッデルブルフ生まれの娘の夫の名は Willem Adriaan van der Stel といい、それら全てがフランドル的であり、デ・ハーゼは完全にフランドル系である。

第 47 代 (49 代も) のディルク・デ・ハース (Dirk de Haas) は、アムステルダム生まれであり、その姓はフランドルでは主に De Haes と綴られ、Hase という名から派生したとされ、第 40 代のデ・ハーゼともともと同じ姓であろう。また Lelièvre (hare、野ウサギ) というユグノーの姓がオランダ語に変換されたものともされ、総じて de Haas のユダヤ的なフランドル起源を示唆する。実際、彼は二度結婚し、いずれもフランドル的な Aletta Zegermans と Elisabeth van Riebeeck の夫であり、デ・ハースもフランドル家系である。

第 59 代 (62、66 代も) のコルネリス・コルネリスゾーン・ファンアウトホールン (Cornelis Cornelisz van Outhoorn) はアンボンの生まれであり、兄ウィレムは VOC の第 16 代総督である。兄ウィレムのところで述べたが、濃厚なフランドルの家系である。

1689 年に第 60 代商館長になったバルタザール・スウェールス (Balthasar Sweers) も、家系がフレンチ・フランドルのリール地方の領主だったルーツがある。なおオランダのナイメーヘンに居を移したスウェールス家から、移住したブラジルでポルトガルに捕囚されるなど辛酸を舐めながら、後にオランダ海軍で提督まで上り詰め、伝説の軍人となったイサーク・スウェールス (1622 年生まれ) が出ている。

## 21. 18世紀以降の商館長たち フランドル人の活躍は留まるところを知らず

以上で17世紀に商館長を務めた人物のうち、ルーツがフランドルと思われる主だった事例を見てきたが、18世紀以降については幾人かを個別に取り上げるにとどめる。さて江戸時代の全168代に及ぶ歴代オランダ商館長の最後の方の注目すべき幾人かについて見ていこう。まず第144代（および146、148代）のイサーク・ティツィンフ（Isaac Titsingh）である。彼は、1745年のアムステルダム生まれの医師（外科医）であるが、同時にライデン大学の法学博士でもある学識派である。18世紀の後半に出島の商館長を三度も務めた。商館長の時には2度の参府を行い、江戸では福知山藩主朽木昌綱、中川淳庵など多数の蘭学者たちや通詞たちと積極的に交流をして、後に日本に関する著作を著した（『日本風俗図誌』1822年など）。出島の後はベンガル長官、バタヴィア評議員、その間、遣清使節として北京滞在（乾隆帝に謁見）を歴任したが、その間も上記朽木らとの情報交換を通じて日本研究を欠かさなかった。1795年に帰国したが、フランス革命による混乱のなか翌96年にはロンドンに辿り着き、さらにパリに移住、東洋学者として名を成し、パリに没した。

Tits はフランドルの姓であり、ing (h) が付加されたものであろう。父方祖母が van Brugge、曾祖母が Pronck、また母方祖母が Bourse という姓でフランドル系と思われる。なお付言すると、このイサーク・ティツィンフはあの有名な（フランドル系と思われる）画家フィンセント・ファン・ゴッホの遠い親戚でもある<sup>(19)</sup>。さらに付言するなら、ゴッホの叔父であるヨハネスは、1860年に蘭領東インド海軍の最高司令官として江戸に来航している。

さてイギリス艦船がオランダ国旗を掲げて長崎に入港しようとした1808年の有名な「フェートン号事件」によって外国船の脅威が強く認識された前後から、つまり19世紀に入った頃から日本はオランダ以外の外国にも目を向け始めた。このフェートン号事件の時の商館長で、フランソワ・ハルマの蘭仏辞書から蘭・日語の『ドゥーフ・ハルマ辞書』を編纂し

(19) 拙稿「ファン・ゴッホの家系分析から見えてくるもの ゴッホはなぜフランス語でも「手紙」が書けたのか」成蹊大学「一般研究報告」、2024年、54巻、24頁）

たことで有名なのが第 158 代のドゥーフ（Hendrik Doeff）である。ちなみに『ドゥーフ・ハルマ辞書』の「ハルマ」は、ハンガリー系と見られる。大坂の緒方洪庵の適塾にいわれる「ゾーフ部屋」があったことは有名な逸話である。日本がフランス語と初めて外交的に出会ったのは 1805 年である。ロシアからレザノフが対日交渉に来航、不調に終わり、その後、翌 06 年と 07 年にその部下がそれぞれサハリン南部とエトロフを攻撃した時、フランス語（とロシア語）の書状を残して立ち去った。幕府はその書状を長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフに蘭訳させたところ、それは日本への開国要求であった。1807 年、長崎のオランダ通詞 6 人にフランス語の学習を命じ、こうしてドゥーフは日本で初めてフランス語を教え始めた人物となった。なお彼は、西洋人として初めて日本語で俳句を詠んだ人物でもある。

Doeff という一風変わった姓の出自、由来は不明であるが、異綴と思われる Doff はフランドル姓であり、母方祖母の姓が Oortsen であり、これも同様である。父方の系図をまっすぐに辿っていくと、7 代前あたりまでフランドル系の姓の配偶者が出てくる（Thezen、van der Walle、Bogaerts、Craen、Adriaens）。本人の妻はバッセ（Bassee）という姓であり、これも同様である。ドゥーフ家は明らかにフランドル系と言える。

ドゥーフが初めて日本でフランス語を教え始めたのに対し、初めて英語を教え始め、また初めての英語辞書を編纂したのは、後にドゥーフの次に商館長になるブロンホフ（Jan Cock Blomhoff）である。フェートン号事件の後、幕府は英語の通詞の養成を決めたが、当時、英語話者は日本にはおらず、相談を受けたドゥーフが、英語が達者だったブロンホフを推薦したのである。こうして 19 世紀に入ってオランダ語以外の外国語の学習がその緒に着き、やがて 1855 年には外交文書翻訳局である洋学所（蕃書調所のち開成所）に発展する。

ブロンホフは 1799 年にアムステルダムに生まれ、15 歳の時にフランス革命戦争に際してネーデルラント連邦軍に身を投じた。しかし戦争の激化のため、その後、一家でプロイセンに亡命、プロイセンの軍人としてイギリスに赴任したのである。その後、VOC は解散していたものの、1805 年にバタヴィアに渡り、フェートン号事件の翌年の 1809 年に、倉庫番として来日していたのである。1817 年には第 159 代商館長として再来日している。その際、ブロンホフが妻子や乳母などを連れて出島にやってきて、

結局、4か月後には夫人たちは出島を去ったが、ティティア・ベルフスマ夫人 (Bergsma) や乳母は、日本に足を踏み入れた初の西洋女性と言われる。なおブロンホフもベルフスマもフランドル姓である。

さて19世紀も後半になると郷土の分裂からすでに二世紀半経過しているが、最後の第168代商館長ヤン・ドンケル・クルティウス (Janus Henricus Donker Curtius) も、その姓 Curtius は依然、フランドルのものである。クルティス (Curtis=カーティス) のラテン語式の姓であるが、そもそもクルティス自体が、古フランス語 (Curtis ないし Coutois) に由来する、「洗練された宮廷式の」といった意味の典雅な姓である。事実、祖父ボードインや叔父ギョームが最高裁判所所長を務めるなど、名門の法曹一家であった。クルティウス本人はアーネム生まれで、親戚の重鎮たちも軒並み学んだライデン大学の法学部に進んだ。1835年にバタヴィアに渡り、高等法院評定官などを経て、1852年に長崎に来日し、満を持して「最後のカピタン」となる商館長に就任した。オランダとしては風雲急を告げる国際関係に対応できる切り札を日本に送りこんだ形だ。

「オランダ風説書」とともに幕府に提出した「別段風説書」によって、米国が強硬に開国を迫ろうとしていること (ペリー来航) を予告し、接点のない米国と日本との間の外交の難しい舵取りをした。先に日米和親条約が締結されると、幕府のために咸臨丸などを含む軍艦の手配、長崎海軍伝習所の設立、オランダ海軍士官の招聘など矢継ぎ早の支援を通じて幕府の信頼を得て、1856年には日蘭和親条約の締結に持ち込んだ。開国後の日本最初の駐日オランダ外交官として、踏み絵の廃止などを実現し、自ら日本語を研究し、『日本文法稿本』を作成したり、さらには、医師のファン・デン・ブルークに依頼し、箱館の五稜郭に繋がる星形 (稜堡式) 城塞の模型を作らせ長崎奉行に教示したり、日本で初めて有線式電信実験に成功するなど、多彩な実績を残して、1860年に離任し帰国した。

先に江戸時代が進むにつれて1年交代の商館長の選任・職責も重要性が薄れてきたと述べたが、それにもかかわらず最後の最後までフランドル系の重厚な人物が商館長に選ばれている実態が以上から明らかである。そのことは、例えば第111代のブラウウェル (David Brouwer)、第120代のブーリン (David Boelen、第122、124代も) など、有力な家系の名前が含まれることから明らかであろう。前者については前述の通りだが (第8代 VOC 総督)、後者は、英エリザベス女王の母 (Anne Boleyn) に繋が

る可能性がある家系で、ドーヴァー海峡沿海の町ブローニュ（Boulogne）に由来するフランドル姓に他ならない。

以上の流れはまさに幕末維新时期になっても変わらない。開港以来、「商館長」は「公使」へと衣替えし、明治維新の大転換を見届けたオランダ公使はファン・ポルスブルック（Dirk de Graeff van Polsbroek）である。彼はオランダの貴族で、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなどの国家代表を兼ね、ベルギーの対日交渉も支援するなど、幕末維新期の欧米諸国と日本との外交交渉において中心人物として八面六臂の活躍をした外交官であるが、本来の姓はデ・フラーフ（de Graeff）であり、少し後の東インド総督アンドリース・デ・フラーフは息子であり（先述参照）、名門デ・フラーフ家の末裔である。

さて以上に加えて、スウェーデン人だったフレデリック・コイエット（第18代、23代）、ドイツ人だったツァハリアス・ワヘナール（27代、29代、「ワグネル」とも）、同じくドイツ人で医者アンドレアス・クレイエル（第53代、56代）などの存在とも相まって、どれほど長崎のオランダ商館長が、狭義のオランダ人以外、特にフランドル系（人）によって担われていたかが分かる。しかも注目すべきは、上記外国人の商館長も、出自を調べると、フランドル系であることである<sup>(20)</sup>。

結局、その全体を数字で示すなら、計168代の商館長が任命されたなかで、ネーデルラントの南北を判断出来ないとした者たちの姓は以下の22人の計40代だけである（Elseracq、Overtwater、Indijck、van Lier、Gruijs、Brevincq、Canzius、Buitenhem、Aouwer、van Vrijberghe、de

---

(20) Coyett (Coijet)、Wagenaer (WagenerまたはWagner)、Cleyer (CleijerまたはKleyer)の各人の出生地はオランダ外の外国であっても、それぞれの姓自体からしてフランドル系と見られる。加えて、Coyettの祖父はそもそもワロンの出身であり、次にドレスデン生まれのWagenaerは上記の三種類の姓の綴りが共通してフランドルを示唆し、また妻がデュッセルドルフ生まれながら Aux Brébis というフランドル姓を有し（妻の他の二回の婚歴の配偶者の姓が de Bucquoij および Sweers でいずれもフランドル姓）、最後の Cleyer は、姓の特定が難しく（Kleyer はフランドル姓）、ヘッセン地方カッセル市生まれのドイツ人であるが、妻がオランダ・ミッデルブルフ出身の旧姓 van Renssen、長女は van Dijk という貿易商と結婚しており（クラフト「ケンベルの先駆者クライアーとマイスター」『トクガワ・ジャパン』所収、40頁）、それらはフランドルの姓である。

Laver, Drinckman, van Rhee, Huijshoorn, van Homoed, Wineke, Crans, Elias, Duurkoop, van Rheede, de Sturler, Levijssohn)。

つまり明らかな外国人を除いた162代の商館長のうち、少なくとも122代がフランドル系と考えられ、率にして約75%である。家系図が判明しているのは一部に留まり、過半数は複数の姓名検索サイトを併用して名前だけで判断しているため誤差はあるにせよ、姓の由来が不明か、姓名からしてネーデルラントの南北を判別できない事例は全て除外しているので(つまり上記列挙に含まれる)、実際にはそれより多くがフランドルに出自的関りを持つ人材によって担われたのではないだろうか。

## 22. 「出島三賢人」の一人 フランドル的要素が目立つドイツ人ケンペル (ケンペル)

嚆矢たるカロンの『日本大王国誌』に代わり、後に一世を風靡したのがケンペル (ケンペル) の有名な『日本誌』であり、例えばヴォルテールやゲーテ等、錚々たる人物にも注目され、黒船のペリー提督も同書を持参している<sup>(21)</sup>。トゥンベリ・シーボルトと並ぶ「出島三賢人」のなかでは一番早い時期にドイツから渡日したエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kemper、またはKämpfer, Kaempfer) は、姓の綴りの複雑さを含めて、その生い立ちや学業の変遷、また日本来航の背景など、不思議な点が多い。

ドイツのリッペ伯領 (中西部ヴェストファーレン) でルター派の牧師の家に生れ、恵まれた家庭環境ではあったが、三十年戦争の混乱の中に育ち、とりわけ生誕地レムゴーは、新教の両派が競い、また魔女裁判が猛威を振るった地としても有名である。宗教の狂気と闘うために、本来の姓であるKemperを、「戦う人」を意味するKaempferに変えたと言われる

(21) クライナー「ケンペルとヨーロッパの日本観」(『トクガワ・ジャパン』所収。50頁)。ちなみにヴォルテール (本名Arouet) の家系のルーツはノルマンディーで、家系にはArouet (te) をはじめ、フランドル姓が多く見られる他 (Bayon, Duguet, Carteron, Tonnelier 等)、女性との関りもフランドルを強く示唆する (Dunoyer, Rupelmonde, du Châtelet, Mignot)。ペリー家 (Perry) の家系は (元は de la Peyre 姓)、アメリカからイギリス (デヴォン) を経てフランス (ブルターニュ) にまで遡る名門で (ノルマン征服に関連)、Peyre, Hazard, Hele, Fry (e) 等々のフランドル姓も散見される。



（『礼節の国』、15頁）。ケンペルの元々の姓を、Kemper（ないし Kemperfer）とするなら、それはフランドル姓の可能性があり、同じ姓を単にドイツ風に綴った可能性もある<sup>(22)</sup>。母親（Drepper）や父の後妻（Pöppelmanns）の姓も、特に後者はフランドル的である。

ケンペルの長兄ヨアヒムはライデン大学で学んだ後、後には講師としてそのライデン大学で教鞭をとり、本人も日本から帰国して直ちにライデン大学で博士号のための手続きを開始し、結果、翌年には無事に学位を取得している<sup>(23)</sup>。帰国後、多く手紙を交換したのは、甥であるオランダ人のダニエル・パルヴェ（Daniel Parvé）であり、その姓はロレーヌ地方等に多いフランス語式の珍しい姓であり、フランドル姓の Parvais と同音異綴ではないか。ケンペルは手紙の中で、「毎年のようにオランダに行って若きパルヴェのもとを訪れることが出来るという希望を述べて」（『礼節の国』234頁）、オランダをまるで故郷扱いしている。

後年、医学に転じたものの、ケンペルはさまざまな土地を転々として、言語や政治や哲学等々、博物学的な学問的遍歴をしている。ドイツ等での学業を終え、スウェーデンで研究中に、アムステルダム市長や VOC 十七人会の中心メンバーでもあったウィツェン（Nicolaas Witsen）がパトロンとなり、オランダ人ファブリティウス大使（Ludwig Fabritius）が率いるスウェーデンのモスクワ・ペルシャ外交使節に秘書兼医師として随行した。この両人は姓名ともフランドル系であり、ケンペルは、ドイツ出身とはいえ、アジアへ旅立つ前のスウェーデン時代から既にオランダ（フラン

---

(22) Kemper はドイツ・ネーデルラント国境地帯に多いユダヤ的な姓であり（機織り職人等の職業からだけでなく、ケルン西方近郊の Kempen という地名からも派生）、もともとの Kemper でも「兵士」を指し得るし、他方、ドイツでは「農奴」も連想されるので、「宗教の狂気と闘うため」という理由には多少留意が必要だ。なお名の方の Engelbert も、姓としてはフランドル的であり、13世紀に殉教したケルンの司祭から広まった姓であり、ドイツ・オランダ・ベルギーに多い。

(23) 新教国オランダの新生ライデン大学だが、当時はラテン語が主要教授言語であり、黄金時代のオランダは同時にヨーロッパの学問の中心地の一つでもあり、オランダ人ではない学生もいた。ケンペルもラテン語で博士論文を提出している。ライデン大学では例えばレンブラントもオランダ語が出来ないと巷間言われたが、ユダヤ系かつフランドル系であるなら、読み書きにはフランス語を用いた可能性がある。



ドル)との重要な人脈があったことになる。

そのベルシャでは現地に長く在住するラファエル・デュ・マン (du Mans) というフランドル姓の修道僧と懇意になって、ベルシャについて多く教わり、それは『廻国奇観』の中に遺憾なく反映されている。ケンペルはそのベルシャでVOC駐在員デ・ヤーヘル (de Jagerはフランドル姓) に頼み込んだ結果、VOCに雇主を鞍替えし、インド、バタヴィアで過ごした後、総督カンブホイスの意を受け、商館付きの医務官として日本に渡ることとなった。

さてケンペルの帰国後、その遺稿 (独: Heutiges Japan (今日の日本)) を基に出版された『日本誌』(History of Japan) は、シヨイヒツァー (J.G. Scheuchzer、スイス人) によりドイツ語から英訳されてイギリス (グラスゴー) でまず出版され (末尾の参考文献参照)、それからの翻訳でフランス語・オランダ語版が続き (仏語版が称賛され、広く世界に知られた)、原語のドイツ語校訂版は、上記とは別に新発見の草稿を基に最後に出版された<sup>(24)</sup>。その校訂ドイツ語版を出版したのが、著名な地理学者ビュッシング (Anton Büsching) の推薦になるドーム (Christian Wilhelm (von) Dohm) というレムゴー出身の若き啓蒙主義者である (自身がユダヤ系で、後にユダヤ人を熱烈に擁護した)。ドームとビュッシングの姓は、ともにフランドル的である。オランダ語の基本資料を基にドイツ語での大著を書き上げる作業を考えると、近い言語同士とはいえ、独蘭二言語に完全に通じている必要があろう。

さてこのケンペルの『日本誌』から (厳密には『廻国奇観』から)、阿蘭陀通詞である志筑忠雄の翻訳により「鎖国」という語が案出され普及したことは有名な話である<sup>(25)</sup>。ただしケンペルのこの書は、今村源右衛門という、後に通詞に登用される有為な若者の協力無くして実現しなかったことは明白である (本人も認めている)。時の商館長デイクマン ((Hen-

(24) 五之治「鎖国論」262頁、マサレラ「『日本誌』史 —ケンペル『日本誌』原稿の購入と出版」(『遙かなる目的地』所収) 参照。

(25) ケンペルは『日本誌』本文においても冒頭から「すでに一世紀近くも、オランダ人以外には国を閉ざしている……」と、日本の鎖国状態について、またオランダ人が来航を許される理由やその内容 (参府など) についても早々と言及しており、「未知で閉ざされた国」日本への当初からの強い関心が伺える。

drik Dijkman、第 65、67、69、71 代）は、かつてケンペルの若い助手だったことで知られる今村源右衛門の通辞任命の面接に立ち会い、源右衛門について「子供の頃から出島の医師に仕えてきたため他のどの通辞よりオランダ語がうまかった<sup>(26)</sup>」と評している。

後の商館長ドーフは、ケンペル自身は二年間、日本語を解さずに過ごし、当時、24 歳の助手の一青年にオランダ語を覚えさせることから始めた」と指摘し（一年で習得）、「此の著作は此の独逸人よりも、寧ろ総督カンホイス（Camphuis）の作たること知らざるべからず」（『ゾーフ日本回想録』、10 頁）とした。文才・学識に優れていて、三度も長崎で商館長を務めた総督カンホイスによる収集情報の重要性を強調し、ただケンペルの単著とすることに異を唱えている。ドーフはさらに「和蘭人の功績は、外國人の為に隠蔽せられしなり」（同上書、11 頁）とも書いており、そのことは普遍化するなら（本研究の趣旨に鑑みれば）、政治経済・社会・文化等々のあらゆる分野において、多くのフランドル人（系）の功績が、オランダ人等、外国人の実績にすり替えられ「隠蔽されている」とも言えよう。

なおケンペルの業績・著書については夥しい数の研究がなされてきたが、他方で、「著者であるケンペルという人物についての研究が発表されることは比較的少なかった」とされる（『遙かなる目的地』3 頁）。ケンペルの出自について、本稿での結論としては、彼はフランドルからドイツへと移住した移民家系であろうと考える。ドイツにひとまず避難した後に、改めてオランダに移住するパターンも多かったが<sup>(27)</sup>、そのままドイツに定住した人々も当然いた。いずれにしてもドイツ北西部は、低地ドイツ（ゲルマン）語である言語を含めて地理的にオランダと親和性が高く、レ

---

(26) ファン＝デル＝フェルデ「日蘭仲介者への注解 ―ケンペルの日本人協力者今村源右衛門英生―」、70 頁（ボダルト＝ペイリー／マサレラ編『遙かなる目的地』所収）

(27) 例えば分かりやすい画家を例にとると、アントワープからドイツのラインラント滞在などを経てアムステルダムに移った有名な画家ヒリス・ファン・コーニンクスロー（Coninxloo）の例などが該当し、さらにドイツの Goch が家系のルーツとされる画家ファン・ゴッホの家系などもそのパターンではないだろうか（拙稿「ファン・ゴッホの家系分析から見えてくるもの ―ゴッホはなぜフランス語でも「手紙」が書けたのか」成蹊大学「一般研究報告」、2024 年、54 巻、23 頁）。

ムゴーも通商路でフランドルと結びついていて、人の往来が盛んであった背景がある。それはリップペ伯の家系にも言え、例えばオランダの第五代ユリアナ女王の配偶者は、リップペ侯国最後の君主レオポルド4世の甥ベルンハルトである。

ちなみにリップペ伯領では1538年にルター派を信奉し始め、さらに1604年からはリップペ伯ジーモン六世の下、カルヴァン派へと宗派替えをしている。しかし新教どうしの宗派間の抗争を経てレムゴーだけはルター派に留まり、そのため独自の裁判所を認められたが、皮肉にもそれが後には魔女裁判が行われる場となった。ケンベルは、レムゴーで猛威を振るい、親戚二人（父の後妻の姉二人の夫である聖職者 Coch および Grabbe<sup>(28)</sup>）の命さえ奪った魔女裁判を心底憎んでいたことは明らかであり、自身、宗教面では非常に寛容な立場を採り、日本についても、無宗教の国と見て批判的になることなく、また五代将軍綱吉の統治を徳が厚いと見て大いに評価している（『礼節の国』、6、17頁）。

## 23. まとめ 本研究の意義・拡張性について

本稿の前編冒頭で述べたように、オランダの大航海時代・黄金時代を、資金的に支援したのみならず、自ら演出・実行したのも移住フランドル系住民（フランスのユグノーを含む）によるものだとしたなら、そのことは程度の差はあれ、直接的にイギリス（やドイツ）に、そして間接的には北米やさらには日本に対しても大きな影響を与えたことになる。フランドル系の外国進出はオランダだけに限定されないからである。

そのことがオランダの急激な繁栄と衰退の理由や、その後のイギリス海外進出の成功の理由、また米国をはじめとするプロテスタント諸国による現在に至る覇権獲得の背景を説明し、さらには、カルヴァン主義の主流・非主流や海外展開の問題は、イギリスにおけるピューリタン革命を中心とする政治史に新たな光を投げかけるだろうし、南アにおける先発のオランダ系と後発のイギリス系（国教会など）との愛憎や、アパルトヘイトを含

(28) 血縁関係にない親戚だが、コッホ (Coch) はドイツ起源の「料理人」を意味する姓であり、広く存在する姓ゆえ出自を特定できず、グラッベ (Grabbe) はハンガリー系の姓と思われる。他方、魔女狩り市長として悪名高いケルクマン (Kerkmann)、コートマン (Cothmann) はフランドル系と思われる。

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究（後）

む先住民族に対する対応の背景解明に資する可能性もある。さらに細かい点で言うなら、多かれ少なかれフランス語も出来る、貿易最優先の彼らがインドネシアで、他の宗主国のように領域支配やオランダ語公用語化に拘らなかつた政策の説明になる可能性もある。

また日本については、江戸時代のいわゆる「鎖国」の有無・是非を巡る論争に一石を投じることにもなる可能性がある。日本において、外交使節としてではなく、二世紀以上にわたり江戸幕府に忠実な長崎奉行監視下の一商人の如く振舞った背景を示唆するからである。

最期に、本稿で対象としたフランドル系が少なからぬユダヤ系を含む事実により、改宗者の問題や、宗教改革と人の移動との複雑で微妙な関係という興味深い要素が付け加わる。まさに本稿での検討事項は、世界の近世史に少なからぬ新たな光を当てる端緒となりうるのではないだろうか。

以上

## 参考文献

- 村上直次郎訳注・中村孝志校注『バタヴィア城日誌』東洋文庫、平凡社、1979年  
F. カロン『日本大王国誌』（幸田成友訳著）、東洋文庫、平凡社、1967年  
金井圓『日蘭交渉史の研究』思文閣出版、1986年  
科野隆蔵『オランダ東インド会社の歴史』同文館、1988年  
加藤榮一『幕藩制国家の形成と外国貿易』校倉書房、1993年  
山本博文『鎖国と海禁の時代』校倉書房、1995年  
永積昭『オランダ東インド会社』講談社学術文庫、2000年  
永積洋子『平戸オランダ商館日記 近世外交の確立』講談社学術文庫、2000年  
羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社学術文庫、2017年  
浅田實『東インド会社』講談社現代新書、1989年  
森良和『リーフデ号の人々』学文社、2014年（森『リーフデ号』）  
森良和『三浦按針 その生涯と時代』東京堂出版、2020年（森『三浦按針』）  
森良和・F. クレインス・小川秀樹『三浦按針の謎に迫る』玉川大学出版部、2022年  
（『三浦按針の謎』）  
小川秀樹編著『ベルギーを知るための52章』明石書店、2009年（小川『ベルギー  
52章』）  
B.C. ドナルドソン『オランダ語誌』（石川光庸・河崎靖共訳）現代書館、1999年  
飯塚一郎『大航海時代のイベリア スペイン植民地主義の形成』中公新書、1981年  
小岸昭『マラーノの系譜』みすず書房、1994年  
岡崎久彦『繁栄と衰退とオランダ史に日本が見える』文春文庫、1999年  
ドンケル＝クルチウス『幕末出島未公開文書一覚え書一』フォス美弥子編訳、新人

- 物往来社、1992年
- エンゲルベルト・ケンペル『[[新版]改訂・増補 日本誌—日本の歴史と紀行—』(7分冊)、今井正編訳、霞ヶ関出版、2001年
- ボダルト＝ベイリー／マサレラ編『遙かなる目的地 ケンペルと徳川日本の出会い』中直一、小林早百合訳、大阪大学出版会、1999年(『遙かなる目的地』)
- ボダルト＝ベイリー『ケンペル—礼節の国に来たりて—』中直一訳、ミネルヴァ書房、2009年(『礼節の国』)
- ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』六興出版、1992年(『トクガワ・ジャパン』)
- ヘンドリック・ドゥーフ『ゾーフ日本回想録』齋藤阿具訳、異国叢書、雄松堂出版、1966年
- 五之治 昌比呂「ラテン語で読むケンペル鎖国論『廻国奇観』論文とその翻訳について」(五之治「鎖国論」) [https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/108530/1/cs22\\_260.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/108530/1/cs22_260.pdf)
- Engelbert Kaempfer, The History of Japan: together with a description of the Kingdom of Siam, 1690-92 ([https://ia601403.us.archive.org/18/items/b29353452\\_0001/b29353452\\_0001.pdf](https://ia601403.us.archive.org/18/items/b29353452_0001/b29353452_0001.pdf))